

患者の80%が喫煙者であるとの報告もあり、患者への禁煙指導は、掌蹠膿疱症と歯周炎治療の両方によい効果を与えるものと考えられる。

#### 演題6. 上顎歯列の狭窄を伴う上顎前突にバイオネーターを適用した2症例

○飯塚 康之, 坂東 三史, 清野 幸男,  
三浦 廣行

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

目的：上顎歯列の狭窄と下顎の後退を伴う上顎前突にバイオネーターを適用した症例のうち、下顎骨の前方成長促進に先立って上顎歯列の拡大を行った2症例の治療効果について報告する。

症例1：初診時年齢7歳6か月の女兒。  
Overbite:0.4mm, Overjet:6.2mm, ANB:8.0°  
で、Angleの分類はⅡ級1類であった。上顎歯列の狭窄と下顎骨の劣成長を伴う開咬傾向のある上顎前突と診断した。装置に組み込まれた拡大ネジで上顎歯列を拡大しつつバイオネーターを適用した。装置の拡大量は3.0mmであった。バイオネーターの適用期間中にSNBが3.8°増加、ANBが3.4°減少、SNPが3.4°増加、Gn-Cdが6.0mm増加、Cd-Goが4.6mm増加し、下顎骨の前下方への成長が認められた。装置適用終了14か月後もその効果が維持されていた。

症例2：初診時年齢8歳3か月の女兒。  
Overbite:3.4mm, Overjet:6.7mm, ANB:6.0°  
で、Angleの分類はⅡ級1類であった。上顎の狭窄歯列と過蓋咬合および下顎前歯の叢生を伴う上顎前突と診断した。上顎のV字型歯列弓の改善のためにファンタイプ拡大床を用いた後にバイオネーターを適用した。ファンタイプ拡大床の拡大量は上顎両側乳犬歯間で3.0mmであった。ファンタイプ拡大床による拡大中には顎関係の変化は認められなかったが、引き続き用いたバイオネーター適用中にSNBが0.5°増加、ANBが1.2°減少、SNPが1.2°増加、Gn-Cdが2.8mm増加、Pog'-Goが4.3mm増加し、下顎骨の前下方への成長が認められた。装置適用終了10か月後もその効果が維持されていた。

考察：2症例とも上顎歯列の狭窄に対する歯列の拡大が、下顎が前方位をとることを可能とし、

バイオネーターによる下顎の成長促進効果が得られたと思われた。症例1に比べて症例2の下顎の前方成長量が少なかったのは、下顎下縁平面が急傾斜していた上に咬合平面も急傾斜しており下顎の下方への成長が強く、前方への成長が出にくかったためと思われる。

結論：上顎歯列の狭窄と下顎の後退を伴う上顎前突にバイオネーターを適用する場合、上顎歯列の拡大を先行して行うことが下顎の成長促進効果をより確実にすると考えられた。